

地域と子どもを育む学校建築

愛媛大学教育学部長・教授 曲田 清維



愛媛発の学校建築の話題が賑やかだ。国指定重要文化財を目指す保存改修に踏み切った八幡浜市立日土小学校（注1）、環境省の補助事業を活用したエコ改修に手を挙げた伊予市立双海町翠小学校（注2）、町並みへの調和とエコスクール改修を目指した内子町立内子中学校など新し



〈写真1〉日土小学校の東校舎（撮影KIKUCHI）

い試みが続く。そして、それらは行政の支援や枠組みを踏まえつつも、地域と、子どもと、風景に大きな影響を与えようとしている。

地域と学校建築

学校は紛れもなく地域に「もつとも身近な「公共施設」である。全国の公立小学校は22,420校、公立中学校は10,150校（平成18年調べ）あり、小学校で言えば約5000人に1校となり、これだけでもいかに地域に密着しているかが理解できる。だがこの数は減り続け、この10年で2000校近くが廃校となっている。もちろん、少子化と市町村合併のせいであり、過疎地を抱える地方にその影響は大きい。

学校はついこの間まで、町や村や地域の



〈写真2〉廊下で遊ぶ子どもたち（日土小）

大切な施設であったが、「学校」と「地域」の距離が遠くなくなりつつあるのも見逃せない。「安全」の問題は、しばしば学校が門を閉じ、地域や保護者に対して閉鎖的になりがちであるし、幾つかの教育改革は逆に、学校・教師と保護者・地域との対立

すら招くことも見られる。こうした中で学校建築の持つ役割は大きく、とりわけ改修や改築時においては地域や保護者との連携を促進する貴重なものとなる。それは教育や学校のあり方、安全の意味や方法を考える良い機会となり、学校・教師・保護者・子ども、さらには地域住民が加わって意見を戦わす良き

場を提供することにもなる(例えば、福島県三春町の学校づくり、福岡市博多小の新築事例など)。

子どもと学校建築

学校は、子どもにとって「学びの場」であると同時に、「生活の場」でもある。小学校でも中学校でも子どもは1日のほぼ3分の1を学校で暮らす。しかし、多くの学校は依然として「教育」としてのみの場であり、子どもが気持ちよく過ごす場と成り得ているかは疑わしい。確かにいくつかの学校では、洋式トイレやランチルーム等の日常的快適さを備えてはいるものの、多

くは一般の公共施設はおろか、住宅より遅れているのが実情である。おまけに、子どもが友や教師と一緒にになって戯れる楽しい空間もある



〈写真3〉学生による日土小調査



〈写真4〉翠小での学校探検(天井裏の確認)

まりない(最近は時間もない)。見通しの良い、管理中心の空間には子どもの居場所すらないのである。それは子どもらの集団の有り様の变化にも見られる。学校規模や学級規模は急速に縮み、学びの集団も遊びの集団も、その形態は既に変わっている。集団が小さくなれば、教室のあり方も、それ以外のオープンスペースのあり方も再考せざるを得ず、「子どもの居場所づくり」を真剣に考えねばならない。

原風景としての学校建築

学校は、地域の人々にとっても、学校関係者にとっても大切な「場所」であり、それゆえ、多くの愛すべき学校建築が地域のシンボルとなるのは当然でもある。歴史を積み重ねた建物は、子、孫、ひ孫へと受け継がれ、地域へ溶け込み、原風景へと育てられる。共有された場で共有された時間を分かち合い、記憶を紡ぐ。だからこそ、学校に人々が集うと自然と和む。学校とそれを形づくる学校建築には不思議な力がある。

さて、過日、故郷に戻った折、遠い昔に卒業した小学校に立ち寄った。建物は随分と新しくなったが、校庭の楠木はそのままだし、古い正門もそのままだった。そこには未だに「私の学校」があった。

(注1)日土小学校は1956年に中学校舎1958年に東校舎が完成。設計は松村正恒(当時八幡浜市役所勤務)。小川に突き出たバルコニーとクラスタタイプの魅力溢れる子どもの空間として、竣工当初から高い評価を得ている。1999年にはDOCOMOMO日本支部より、「日本の近代建築20選」に選定された(写真1・2・3)。

(注2)1931年建築の木造校舎。赤い屋根と正面に突き出た玄関並びに2階校長室が象徴的。環境省のエコフロン事業(学校工コ改修と環境教育)の略称)を活用しながら、学校、地域、行政の連携により、学校存続と校舎改修が真剣に進められている(写真4)。